ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第 133回放送の概要（2018 年5月 26 日放送）

パーソナリティ

たろう
（佃　由晃）
なか
（中嶋邦弘）
かりん
（妹尾優香）

ミキサー
門ちゃん
（門田成延）

会計
小山俊則

相談役
わだかん
（和田幹司）

1．ゲストコーナ（1）多言語センターFACIL 翻訳通訳コーディネーター　山口まどかさん

山口さんは神戸高校出身、兵庫高校とは春と秋の２回、定期戦が開催されるので、柔道部として定期戦出場のため兵庫高校に来たことがある。中学は剣道部、高校に入り剣道部の見学に行ったときに道場が隣の柔道部に勧誘された。剣道は竹刀が必要だが柔道は体一つで戦えるので入部した。

震災時は今と同じ東灘区に住んでいた中１の時で、その地域は被害の大きかったところで、住んでいたマンションは崩れなかったが、住めなかったので灘区の祖父母の家に３月まで避難した。中学校は当時は書類なしで仮入学で転校できたので上野中学校に通った。自宅に帰りたかったので時々自宅を見に行っていた。自宅は修繕し４月には戻った。本山中学校は校舎が潰れたのでテント教室で授業を受けたが、すぐに仮設校舎ができた。家族や直接の友達は無事であったが、弟の友達や友達の兄弟など身の回りに亡くなった人は多かった。中１なのでできることはないと思っていたが、当時は色々やることがたくさんあり、災害対応はいつでも誰でも自分が動けるようにしておく必要があることを認識した。

大学卒業後、大企業の人事部に配属されたが面白くない仕事だった。仕事は人の役にたちたいと思っていたが、決められた仕事をやらなければならないこと、仕事上 55 歳の人に減給の話をしたり早期退職で関係会社に移籍の話をする仕事だったので、ありがとうと言われることは一切なく、恨まれるやりがいも面白みも全くない仕事だった。就職時はバブル崩壊後一番の氷河期と言われていた。

職場は滋賀県だったので辞めてから気分転換に、パートで経験はなかったがカメラマンをした。琵琶湖遊覧船ミシガンで観光客をなかば強引に撮影し、その場で写真を販売するという仕事だった。家から近く琵琶湖が好きで性に合っていた。カメラが好きで撮るのが面白く、船に乗るのが好きで撮った写真を買ってくれるのはうれしかった。押し売りに近いと思っていたが、旅行で来ているので思い出になって良かったと言ってくれたので楽しい仕事だった。

パソコン相手の仕事も嫌で人の役に立つような仕事を探し、消防職の地方公務員試験を受け**消防士**になった。人のためにという強い思いを持った子供ではなかったが、自分がやる気を出すには人のためになる方がいいという思いであった。半年間の訓練後消防車に乗り、その半年後救急車に乗るための３か月間の訓練を受けた。西宮市は人数が神戸市より少ないため、消防職員は消防、救急、救助、予防といった業務を兼務する。小学校などに出向き訓練をしたり、建物の査察なども経験した。初めの３年間は車両の後部座席（隊員席）だったが、訓練を受け、車両の運転と放水等の車両操作のできる機関員になった。

兵庫県で同期の女性消防士は 7 人、西宮市内には先輩が 3 人いた。訓練では一人で一人を担ぐこともあるが、実際は複数で出動するのでそのようなことは少ない。消防士と女性について、個人的には男女の差を感じなかった。体力的に多少の差はあるが、あとは設備面で、女性用の仮眠室の整備が遅れていたり、女性専用室に指令のスピーカーを付け忘れたとかいう程度。

消防士を８年間務めたが、一生同じ仕事をするとは思ってなく、仕事は変わっていくものと思っており、新しいチャンスを探していた。海外で働きたいとは漠然と思っていて、語学が堪能でないと求職ができないと思っていた。経済、法律といった専門性がなく、防災で語学が不十分では海外で普通の求職活動はできないが、**青年海外協力隊**の募集要項に防災の枠があり、事前に語学訓練もあったので応募し、青年海外協力隊で海外行く選択をした。大変危ない中米の**エルサルバドル**に赴任した。赴任先を聞いたときは危ない国とは思わなかった。

赴任前に長野県にある JICA の研修センターで３か月間の研修を受けた。メインは語学訓練で現地での活動の仕方、安全管理などであった。３月に仕事を辞め、３か月間の研修後６月末に出発した。

2．ミュージック

お送りしている曲は WMIBA（ワールドミュージックインターネット放送協会）のご厚意で提供された楽曲から、アーティスト　小川悦司さんの「The Fortune」です。

3．ゲストコーナー（2）山口まどかさん

エルサルバドルに赴任し、JICA 指定のホームステーで一般家庭に宿泊していた。食事は果物、野菜の種類が豊富でヘルシーな印象。主食はトルティーヤ（トウモロコシを粉にし、練って焼いたパンのようなもの）で、メインとなるランチはトルティーヤが 2 枚、炒めた野菜、鶏肉（焼く、スープ）、チャーハン

のようなもの、フルーツジュースが多い。水はよくないので発熱、感染症はしょっちゅう。週に 1 回ほど腹痛を通り越して急に発熱していた。水は買ったボトルを使用。フルーツジュースを作る時にボーフラのいた水をつかっていたので食中毒になった。シャワーと食器洗いはボーフラを気にせずその水を使っていた。

地方都市の市役所の危機管理課に配属された。仕事は、小学校を訪問し、日本で行っている防災訓練、すなわちベルが鳴ると机の下に入り、運動場に集合するため押さない、走らない、しゃべらないといった防災訓練の基本を先生に教え、生徒と共にやってもらっていた。日本でいうところの消防団や自治会の大人に消防訓練の指導を行った。また大学、会社から防災や救急の応急処置の講習を依頼されることもあった。エルサルバドルは火山が多いが、災害は噴火より地震が多く、雨季乾季があるので洪水が多い。

小学校での防災ゲーム

西宮市ちびっ子消防団

危機管理課は市民が困ったことは何でも言ってくるので、洪水防止という名目でドブ掃除が大きな仕事であった。デング熱も多く蚊の発生原因の対策としてもドブ掃除が重要な仕事とされていた。汚いドブを一日中掃除するのが日常業務として多かった。消防車、救急車はほとんど機能していなかったので、病人が出た、事故が起きた、火事が発生したから来てくれという要請も危機管理課が対応していた。消防署はボランティア組織のため人がいない日が多い。なので、市役所のメンバーと共に、丸腰の状態で消火に行っていた。ピックアップトラックにけが人を乗せて搬送した。青年海外協力隊員は JICA から海外では運転を禁止されている。また木が育ちすぎ、家に倒れてくるので倒木除去作業が多かった。

防災訓練

救命訓練

三角布の使い方

倒木の撤去

現地の人との交流は、仕事が 16 時に終わるので、仕事帰りにバスケットボールの練習をしているグランドを見つけ、経験は全くなかったが一緒に仲間に入れてもらい、友達が増えた。日本と同じように職場の人とよく飲みに行ったりしていた。現地の人と交流することは一番の安全管理になると思った。現地の知り合いから、地域や道のここが危ないという情報が自然に会話の中で入ってくる。道に迷ったり落とし物をしたときに助けられたことがいっぱいあった。バスケチームで銀行に勤めている人、病院勤めの看護師がいたので、その人の知人でうまくいったことが多かった。狙われるようなことは全くなかった。

エルサルバドルの 2 年間で得たことは、知り合った現地の友人は自分の財産になり、困ったときは助け合いが大事ということを身に染みて感じた。一声かけてもらえると寂しさがなくなったりすることが多く、このような体験は日本では感じることがなく、今後に役立つと思っている。

帰国後、**多言語センターFACIL** を選んだのは、ハローワークの検索で震災をルーツとする団体、言葉の壁を取り払う活動、医療通訳の手配をしていることなどを読み、マッチするところが多いと感じたから。担当業務は翻訳通訳コーディネーターとして依頼内容を精査し、値段を決め、適切な翻訳通訳者を手配する。また医療通訳とインターンの受け入れを担当。FACIL はスペイン語で簡単、やさしいという意味、またファシリテーターという導く、役立つという意味合いもある。翻訳通訳の対応言語は現在 60 以上、多い言語は英語、中国語、韓国語、ベトナム語、スペイン語、ポルトガル語、常勤有給職員は 6 人、その他ボランティア、アルバイト、インターンで対応している。インターン生は大学生の他、社会人、主婦の方が手伝っている。

医療通訳は、兵庫県では FACIL が最初に取り組みを始めた。2003 年から準備を始め、実際に通訳者が病院に初めて同行したのは 2005 年であるが、当時は病院側の必要性認識は極めて低く、FACIL が助成金をやりくりして対応していた。医療通訳がはじまる以前は、通訳が必要な場合、患者の家族や知人が学校や仕事を休むなど無理をして病院に同行していた。この年の依頼件数は年間 36 件。2011 年からモデル事業として病院、県が協力して取り組むことになり、仕組みを整えたが現場の認識は低かった。すべ

ての患者に適正な医療を提供するため、また通訳は患者だけでなく医者の言葉も通訳するため、病院も通訳料を負担することに同意した。通訳に支払う費用は現在は４時間、交通費込みで5000円(当時は4000円)、患者が３割（1500円）病院が７割（3500円）負担している。最近依頼件数が急激に増加しており、2011年は５件、2012年33件、2013年148件、2014年204件、2015年は299件、2016年432件、2017年903件となっている。この件数は協定を結んでいる協力病院のもので、それ以外の病院からの依頼は寄付金で対応しており、その件数を入れると2017年は1000件を超えている。

1000件をコーディネートしているFACILには医療通訳事業による収入がない。行政の支援を要請し続けていたところ、今年は県、市から補助が得られる見込みが出てきた。先行している神奈川県の場合は行政からの支援が大きいと聞いている。本来は国の健康保険制度の一つとして扱われるものと考えているが、行政では医療通訳は優先度が低い項目と認識されている。

協定病院は、中央市民、西市民、西神戸医療センター、アイセンター、県立こども、県立西宮、神大付属、関西労災、県立尼崎の９病院。医療通訳者は専門用語を知り、患者につらいことを伝える、家庭の事情を聞くなどかなりストレスのかかる仕事である。初めて医療通訳を始める人には最初FACILで面談し、ストレスがかかることなどを説明している。最近のインバウンドでの来日者の急増、2012年東京オリンピックを考えると、国としてのしっかりとした施策が必要である。現状は行政がNPOに甘えすぎと言わざるを得ない。医者は夜中でも来てほしいというがボランティアに頼らない制度作りがまず必要である。

FACILのホームページに**医療通訳ラジオ講座**が掲載されています。実際の通訳者の苦労を聞くことができます。

http://tcc117.jp/facil/iryo_radio.html

4．地域瓦版

兵庫高校創立110周年記念事業の一つ「ゆうかりフェス」が５月27日12時30分より新開地アートヴィレッジセンター（AVC）で開催されます。出演者は兵庫高校生とOBですがどなたでもロック、フォーク、ジャズなどを無料で楽しんでいただけます。

本日の放送は、“Youtube Live”配信をしました。

https://www.youtube.com/watch?v=xaplhkDD1cE

放送音声は、FMYY の HP で視聴いただけます。http://tcc117.jp/fmyy/

また、音声と放送概要は、番組のＨＰ　http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/で視聴いただけます。

（注）番組ＨＰのＵＲＬは本年５月より変更しています。

以上